

## ローマ人への手紙3章21-31節 「信仰による神の義」

### 1A 神の義が示された今 21-26

1B 律法と関わりのない義 21-22

2B 価なしの義認 23-24

3B 宥めのささげ物 25-26

### 2A 信仰の原則 27-31

1B 取り除かれる誇り 27-28

2B ユダヤ人と異邦人の神 29-30

3B 律法の確立 31

## 本文

ローマ人への手紙3章を開いてください。私たちは今朝、パウロがこの手紙を書いた最も言いたい部分、主張を読むこととなります。1章で、「福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」と書いていました。信仰によって神の義が現れるという主題です。私も何度となく、この説教壇から、「神を信じるのです。この方に期待をかけるのです。たとえ、そう見えなくても、神がおられ、神が働いているというところに立脚する、堅く立ってください。」とお願いしますね。神のご計画の中で中核となっている、人との関わりが、今朝学ぶところに書いてあります。21節から31節を一節ずつ見ていきます。

### 1A 神の義が示された今 21-26

1B 律法と関わりのない義 21-22

<sup>21</sup>しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。

パウロは、「しかし今や」という言葉から始めています。神の御怒りが真理を阻んでいる人々に表れていると論じ、すべての人が神の裁きに服するとはっきりと、言い表しました。そして、「しかし今や」なのです。ここの「今や」には、キリストが到来した今、このキリストがご自身の死をもって、罪の赦し、贖いを成し遂げられた今、という意味が含まれています。長いこと旧約の時代、いやアダムが罪を犯した時以来、待っていたことが、今、実現したのだという意味合いです。

「律法とは関わりなく」と次に言っています。神がご自分の聖さ、正しさについて、モーセによって律法が与えられました。主の教えを守り、この方に聞き従うことによって、あなたがたは祝福され、宝の民、祭司の王国となると約束されていました。しかし、律法自体には、律法を守る力がないのです。イスラエルは、律法を与えられた尊き民ですが、しかし、自分自身でこれを守ることができな

いことが、その歴史を通じて明らかにされました。しかし今、神の前に正しく生きる方法が、律法とは別の方法で明らかにされたのです。それは、律法に言われていることを実現し、律法に違反した者を罰するという要求までも満たされた、イエスがおられるということ。そしてこの方を信じ、受け入れ、この方を主として生きていくというところに、正しさがあるのだということです。

しかし、「**律法と預言者たちの書によって証しされて**」いました。律法には律法を守る力を与えないのですが、律法の中に、キリストを信じて生きる道が示されていたのです。これからパウロが解き明かしていきますが、「宥めのささげ物」と言う言葉が出てきます。血を流すことによって、罪が清められます。神が、罪に対して裁かなければいけない、その御怒りをいけにえが身代わりに受けるということが、律法において教えられています。そこにこそ、神に受け入れられる、義と認められる道があるのだと信じて、それらを行うことができたのです。旧約の時代も、信仰によって義と認められていました。ヘブル書 11 章には、旧約の時代の人々が信仰によって生きていた証しがたくさん書かれています。

そして、「**預言者たちの書**」によって、とありますね。預言者たちの書には、メシアご自身が民のそしりを受ける、身代わりになって苦しみを受けることが書かれています。その代表的な預言は、イザヤ 53 章です。「しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平和をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒された。(5 節)」

<sup>22</sup> すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。

パウロが強調しているのは、「**すべての人**」です。「そこに差別はありません。」と言っていますね。ユダヤ人たちは、自分たちに与えられた律法によって義と認められると思っていたので、異邦人は神の救いについては蚊帳の外だったのです。異邦人も改宗することによって、ユダヤ教の一員になって、それでようやく救われると思っていました。けれども、パウロは、信じるすべての人に義が与えられるというのが、神の義だ。ユダヤ人にも異邦人にも差別はないのだ、としました。

## 2B 価なしの義認 23-24

<sup>23</sup> すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、

パウロは、1 章と 2 章で、異邦人だけでなくユダヤ人もすべてが罪の下にあることを論じました。ですから、すべての人が罪を犯しました。そして、「**神の栄光を受けることができず**」とあります。これは、罪というギリシア語「ハマルティア(ἀμαρτία)」は、「的を外す」という意味です。そこで、このパウロの言葉は、神の栄光、神の基準から外れてしまったということになります。神が、天地を六日で造られて、六日目にご自分のかたち人に人を造られ、大いに喜ばれている姿が 1 章にあります。

そこにある神のかたち、神に似た者としての姿から落ちてしまったということです。神の栄光がその人から表れていないことです。これが的外れ、ということです。私たち人間のさまざまなあり方は、結局、そうやって神の栄光にあずかっていないというところから来ています。

<sup>24</sup> 神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。

ここに、偉大な真理があります。「神の恵み」です。恵みおギリシア語「カリス(χάρις)」は、「好意や親切、感謝」であります。気前の良さでもあり、そこにある麗しさです。つい最近、あるユーチューバーが、パキスタンの食べ歩き動画を掲載していました。そこで、とてもおいしいと言われる屋台の食べ物を食べたなら、その店主が、「外国からのお客さんなので、お代は要りません。」とのこと。このような気前良さ、親切、好意、本来、支払わないといけない対価を払わないでよくする、相手への好意です。

神の恵みほど、私たちが悟り、受け入れることのできるものはありません。神が、一方的に好意を寄せるのです。こちらで神によく思われるようなことを何もしていないのに、それでも憐れみ、慈しんでくださり、良くしてくださるのです。ここに「価なしに義と認められる」とありますが、「原因なしに」という意味です。義と認められる理由を私たちに持っていません。むしろ、罪に定められるべき理由を多く持っています。何の理由、原因もないのに、一方的に神が義と宣言してくださるのです。

どのような形で恵みが現れたかといいますと、「キリスト・イエスによる贖い」です。「贖い」とは、買い戻すことです。ここでは、自分の手元を離れてしまった者がいて、奴隷市場に売られていたところを、対価を支払って買い戻すという背景があります。奴隷であったところを、対価を払って自由にするということです。そこから、罪の下にあって、どうしようもないがんじがらめになっている人々を、キリストがご自分のいのちという対価を払って、買い戻し、自由にさせたという意味合いがあります。イエス様が言われました、「マル 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

そして、「義と認められる」という言葉、これは、しっかりと吟味する必要があります。これは、正しい人になるということではありません。義と宣言される、と言ったほうがいいです。実際はそうではないのに、そのようにみなされるということです。私たちの持っている口座には、お金が全く入っていません。いや、ものすごい借金をしています。その借金がいつの間にか、すべて清算されました。そして自分の口座には、天文学的な金額がいつの間にか振り込まれています。それは、キリストが支払ってくださったからです。この方が肩代わりして、借金を支払い、そしてご自身の行われたこと、その報いを私たちの口座に入れてくださったのです。

ですから、ただ罪を赦していただいて、ないことにしていただいただけでないのです。神の恵み

においては、もう一步、先に進んでいます。それは、イエス・キリストの正しさ、この方の義が、私たちに与えられたということなのです。この方であって、父なる神は私たちを見てください。キリストが正しい方ではありますが、キリストのうちにいる、この方に結びついているということだけで、それにふさわしい祝福を受けるということなのです。

放蕩息子のことを思い出してください。放蕩息子は、父の財産を放蕩で使い果たして、豚のえさも食べたいと願うほど、空腹になっていました。その惨めな状態から、天に対しても、父に対しても罪を犯したことを悟り、それで、父の憐れみによって、しもべとして働かせるようお願いにいきます。「もう、息子と呼ばれる資格はありません。」と言います。ところが、父は彼をそのまま受け入れ、接吻し、しもべとして働かせてくださいという彼の願いは全く耳に入らず、しもべに言いつけて、「ルカ 15:22-23 急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。」というのです。これは、息子そのものに対する待遇です。父のものを受け継ぐ印としての衣であり、指輪なのです。息子は父の財産を食いつぶしたのに、なおのこと息子としての資格をもって受け入れました。

### 3B 宥めのささげ物 25-26

しかし、神は正しい方、義なる方なのに、どのようにして、全く、義の行いのない者、罪を犯した者を義と宣言することができるのでしょうか？そのことを説明しているのが、次です。

<sup>25</sup> 神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。<sup>26</sup> すなわち、ご自分が義であり、イエスを信じる者を義と認める方であることを示すため、今この時に、ご自分の義を明らかにされたのです。

私たちが信仰によって、この方を、「血による宥めのささげ物」として公に示されたとあります。これは、一言で言いましたら、「イエスが、私の罪のために、それに対する神の怒りを代わりに受けてくださった。」ということです。

宥めのささげ物、というのは、神の聖所における宥めの蓋のことです。神はモーセに、幕屋を造りなさいと言われました。ご自身がその中に住まれ、そこでご自分の栄光を現わし、語ってくださることを約束されました。けれども、聖なる神が共に住まわれることになったら、人々が死んでしまいます。聖なる方の前に、汚れている人間が近づくことはできないからです。そこで、神は幕の仕切りを作るように命じられました。聖所の中には、さらに仕切りがあり、垂れ幕があります。その中に入ると、聖所の中のさらなる聖所、至聖所です。そこに、契約の箱が安置されています。十戒の記されている石の板がその中に入っています。そしてその箱の蓋となっているのが、「宥めの蓋」です。純金できており、主を礼拝している御使い、ケルビムが彫られています。その至聖所に、

年に一度、大祭司が入ります。牛を屠った血を携えて入っていきます。そして宥めの蓋のところに、その血を振りかけるのです。そのことによって、イスラエルの犯した罪を清めるのです。

したがって、宥めの献げ物というのは、神が罪に対して、義の怒りを持っておられますが、それが十分に満たされたということを意味します。誰かが大きな罪を犯して、それにふさわしい刑罰が処せられた時に、宥められたのです。ここでパウロが言っているのは、キリストが十字架の上で血を流されたのは、罪に対する神の御怒りが完全に満たされた、ということを意味しているのです。

これでようやく、イエス様がなぜ、十字架で罪人とみなされたかがわかると思います。人の目に、イエス様は罪人とみなされました。しかしそれ以上に、神の目に罪人とみなされて、呪われた存在となったのです。それでイエス様は十字架の上で、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と言われたのです(マルコ 15:34)。そこで、ここで「ご自分の義を明らかにされるためです。」とあります。神は、私たちの罪を赦し、義と認めるところまでされたら、神は罪を認めるような、罪人をそのままにしておくような不義の方なのか？と言ったらそうではないのです。ご自分の罪に対する怒りを、イエス様の十字架で示されたのです。

そして、「神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。」とパウロは言っていますが、これは、人類が始まって以来、人々が犯して来た罪に対して、それを裁いて人々を滅ぼすことをなさらなかった。今この時、ご自分の御子キリストにあって、すべての罪を背負うようにしてくださった。今の私たちだけでなく、キリストが現れる前の罪を忍耐して、裁かないでおられたということです。

ノアの時代に、その神の取り計らいを垣間見ることができます。主は、人々の思いが悪に傾いているのを見て、人を造られたことを悔やみ、心を痛められました。そして、水によって人々を滅ぼそうとされました。しかし、ノアとその家族をご自分の恵みの中に見だし、彼に箱舟を造らせました。洪水によって、すべての人が滅びました。そして洪水の後、箱舟からノアの家族を出しました。ノアが祭壇を築き、全焼のいけにえを献げました。そして、そのいけにえの香りをかがれて、こう言われたのです。「創 8:21 【主】は、その芳ばしい香りをかがれた。そして、心の中で【主】はこう言われた。「わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらさしめない。人の心が思い図ることは、幼いときから悪であるからだ。わたしは、再び、わたしがしたように、生き物すべてを打ち滅ぼすことは決してしない。」主は、もし罪に従って裁けば、すべての人が滅ぼされてしまう。だんだんやり直しても、人々は滅んでしまうだけだ。だから、むしろ恵みによって人々を悔い改めに導く道を選ばれたのです。

こうして罪を見逃してこられて、今になって、キリストにあってご自分の怒り、正しさを示されたのです。こうしてご自身が義なる方であることが示されました。そして、宥めのささげ物になられたイ



イエスに信頼を置く者たちを、彼らの行いではなく、イエス様の行われたことによって義と宣言することが示されたのです。

## **2A 信仰の原則 27-31**

そして次に、このようにして信じるという原則によって義と認めることによって、私たちから誇りが取り除かれたことを教えます。

### **1B 取り除かれる誇り 27-28**

<sup>27</sup> それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それは取り除かれました。どのような種類の律法によってでしょうか。行いの律法でしょうか。いいえ、信仰の律法によってです。<sup>28</sup> 人は律法の行いとは関わりなく、信仰によって義と認められると、私たちは考えているからです。

信仰の律法、すなわち信仰の原理によって誇りが取り除かれます。行いによれば、必ず、「自分がこのことを行った」という誇り、自負が出てきます。どんなに謙遜にふるまっても、それは偽物でしかありません。自分が行ったことによる自負が必ずでてきます。どんなに誇りを取り除こうとしても、その取り除こうと努めればそれもまた自分の行いになって、結局、誇りとなるのです。私の大学時代、キリスト者の先輩が救いの証しをしました。彼は若い時に、論語を実践してみようとしたそうです。一定期間、実践してみて、できたのだそうです！ところが、心が高ぶりでいっぱいになっていました。自分ができた！という高ぶりです。

ですから、信仰によってのみ、本当に誇りを取り除くことができます。ここで注意が必要です。信仰の話をする時、信心深さと混同する傾向があります。自分がどれだけ信じられているのか、という、これまた行いの世界に戻ってしまうのです。この人は信仰がある人だ、あなたは信仰が足りないね、となるのです。信仰という言葉でさえ、どうしても行いの世界にして、自分たちを誇りたいと思ってしまうんですね。イエス様は、「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があれば、この桑の木に『根元から抜かれて、海の中に植われ』と言うなら、あなたがたに従います。」と言われました(ルカ 17:6)。からし種は、本当に小さい種です。粉末のような、小さな種です。ここでイエス様は、信心深さなど全く関係ないことを、その誇りを粉々に壊しておられるのです。

信じているということは、信頼していることです。自分で信じている、信じていると念じたりしているものではありません。信じていると意識さえしていない場合があります。意識していないほど、信じ切っているからです。そして、信じていることが行いに出てきます。自分がいくら信じていると言っても、行いが異なっていれば、それは、本当は信じていることが違っているということになります。イエスが、自分の罪のために死なれたということを、そのしてくださったことに信頼を寄せている、ということです。そのことによって、義と認められているのですから、誇りは取り除かれました。

## 2B ユダヤ人と異邦人の神 29-30

<sup>29</sup> それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人の神でもあるのではないのでしょうか。そうです。異邦人の神でもあります。<sup>30</sup> 神が唯一なら、そうです。神は、割礼のある者を信仰によって義と認め、割礼のない者も信仰によって義と認めてくださるのです。

律法の行いではなく、信じることであれば、それはユダヤ人だけでなく、異邦人にもできることです。だれにでもできることです。空気には酸素があり、人であればそれを吸って生きられる。そのぐらい、信じることは心の中でできることであり、すべての人に与えられている力です。ペテロは、エルサレムの会議において、ローマの百人隊長コルネリウスの一家が信じて、聖霊のバプテスマを受けたことについて、こう話しています。「使徒 15:9 私たちと彼らの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。」

けれども、ユダヤ人は律法を行わないで、神に義と認められるということ自体があってはならないとしていました。律法という枠組みがあって始めて義と認められるとしていました。けれども、だったら「神は、ユダヤ人の神だけなんですか？」とパウロは問いかけています。ユダヤ人の神に対する見方は、この方は唯一神であり、ユダヤ人の神であるとしています。けれども、そうしたらユダヤ人のための神がおられ、異邦人のための神がまたいるということになってしまっただけで矛盾していません。事実、ユダヤ教の人たちは、異邦人がキリスト者であること、イエスを神の子と信じるのは構わない。けれども、我々はユダヤ人だから関係のないことなのだ、とするのです。そうすると、ふたりの神になってしまっただけで、唯一の神ではなくなります。ユダヤ人にとっての神は、異邦人にとっての神なのです。ですから、ユダヤ人にならなくとも、異邦人のままで義と認められることによって、初めて神はお一人であると分かるのです。

キリスト者の中でも、排他的になることがあります。未信者の間には神はおられない。我々のようにならなければ、神はおられないのだとします。そうやって、壁を作ってしまうのです。けれども、そうではありません。神は、信仰をまだ持っていない人々の間でも働かれています。その神に気づいていない、その神を認めていないのが問題であって、私たちと同じようになるということではありません。イエス様は、すべての人のために死なれました。ただ信じることによって救われるのです。

## 3B 律法の確立 31

<sup>31</sup> それでは、私たちは信仰によって律法を無効にすることになるのでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ、律法を確立することになります。

今後、この言葉はとても大切なものになります。律法の行いではなく、信仰による義なのだということを話していくと、律法を否定するものなのだ、ということになりかねません。いいえ、むしろ律法を確立することになるのです。その鍵は、「キリスト」です。イエス様こそが、律法を確立された方

で、この方が私たちの信仰によって内に住んでくださり、キリストにあつて律法が私たちの内で満たされたのです。

イエス様は、律法を厳格に重んじていると言われるパリサイ派、また律法学者のことを意識されながら、山上の説教で教えられました。「マタ 5:17-18 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思つてはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。18 まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。」パリサイ人と同じ律法の見方どころか、それをむしろ強化しているような感じでした。そして、律法について解き明かされます。「殺してはならない」というのは、兄弟を馬鹿と言ったり、恨んだりすることをして、最高法院で裁かれると言われました。「姦淫してはならない」というのを、心の中で女に情欲を抱くことが姦淫することになると言われました。外から入る者が人を汚すのではなく、内から汚れが出て来るのだとされました。パリサイ派でさえが、自分たちが守ることができるように、適当に解釈を都合の良いように変えてしまっていたのです。しかし、イエス様はこれらの戒めを、そこにある意図、心の内の態度も含めての意図も含めて守られたのです。

そしてイエス様は、律法にあるキリストの預言、また予め示されていたものを実現されました。例えば、ツアラアト、らい病人を触られて清められました。レビ記においては、らい病患者は汚れており、離れていなければいけないと教えられていました。また清められた場合、祭司のところに行くことも書かれています。けれども、肝心の清められることについては書かれていないのです。そこで、キリスト、救い主の到来を彼らは待っていたのです。その清めの実現をする存在をです。イエス様はらい病人に触れられて、清められたのです。そして、祭司のところに行きなさいと言われました。

また、イエス様は、お生まれになられた時に、ヘロデから命を狙われました。ヨセフとマリアはエジプトに逃れました。そして、ヘロデが死ぬと戻ってきます。イスラエルの民は、約束の地にいたところからエジプトに下り、そこからこの地に戻ってきました。こうやって、イエス様の姿は、イスラエルの苦しみと共にしてくださり、そしてそこからの救いと解放を与える方となったのです。

そして何よりも、律法の確立は、律法は違反者には死を要求するということです。死ななければならないという定めが数多く書かれています。そこにおいて、キリストは律法の要求するところの死を全うされたのです。ここにあって、イエス様は律法を完成されました。だから、この方を信仰によって受け入れることによって、律法の目的が達成されるのです。

パウロは、どんどん話を深めていきます。信仰の義というと、何か抽象的に聞こえますが、私も努力はしてみました、具体的な話を入れてみました。けれどもパウロ自身が、次、4章でアブラハムの生涯で、信仰によって義と認められることを分かりやすく説明していきます。